

国際宗教社会学会 (ISSR/SISR) 2023 年台北大会 参加記

2023 年 7 月 3 日から 7 日にかけて、国際宗教社会学会 (International Society for the Sociology of Religion/ Société internationale de la sociologie des religions) の第 37 回学術大会が開催された。大会テーマは「対話する諸宗教——変容、多様性、物質性」(Religions in Dialogue: Transformations, Diversity and Materiality) である。ISSR/SISR は 1948 年に設立された宗教社会学の国際学会で、2 年ごとに学術大会を開催している。今回の会場は台湾の台北市東部に位置する中央研究院 (Academia Sinica)。ISSR/SISR は主に欧州と北米で開催されてきたが、今回は史上初のアジア開催だった。もともとは 2021 年大会を台湾で開催する予定だったが、新型コロナウイルスの拡大によりオンライン開催となったため、初のアジア大会は 2023 年大会に持ち越しになったという経緯がある。

今大会では、当研究室の教授の藤原聖子先生が基調講演 (Plenary Speech) を行った。タイトルは「つながりの実践、代行スピリチュアリティ、ジェンダー化されたフェティシズム——現代日本の若者文化における無宗教的なもの/宗教的なものの変容」(Practicing Belonging, Vicarious Spirituality and Gendered Fetishism: The Transformation of the Non-religious/Religious in Contemporary Japanese Youth Culture)。日本と西洋の現代社会論や現代宗教論を応用して、現代日本における若者文化から宗教と世俗の相互変容をみるという内容である。藤原先生は東大の宗教学の演習で 10 年近く現代日本の若者文化を取り上げてこられたが、そこでの成果が惜しみなく生かされた講演だった。当研究室の修士 1 年の三浦大樹さん、博士 1 年の院生の和田理恵さんの研究成果も紹介された。また、日本特殊論を慎重に退けつつ、日本と西洋の理論を巧みに接続する手法は、西洋発の ISSR/SISR が開いた初のアジア大会という場にぴったりだった。

筆者はというと、「圧力に晒される世俗主義：比較の観点」(Secularisms under Pressure: Comparative Perspectives / Laïcités sous Pression : Regards Comparés) というセッションで、「日本のライシテの「右傾化」? : 那覇孔子廟訴訟の事例」(« Droitisation » de la laïcité japonaise ? le cas du procès du temple de Confucius de Naha) というタイトルのペーパーを発表した。参加募集の時点で、ライシテ (世俗主義) の国際比較に関するセッションを企画するので参加しませんか、と当研究室 OB の伊達聖伸先生からお声がけいただいたのがきっかけである。セッションの企画者は、メキシコのロベルト・ブランカルテ先生 (Roberto Blancarte)、ケベックのダヴィッド・クッサンス先生 (David Koussens)、そして伊達先生の三人。申込人数が多かったのでセッションは 3 回に分けて開催された。このセッションには日本からは伊達先生と筆者のほか、現代中国のイスラームを専門とする奈良雅史先生 (国立民族博物館准教授) がご参加くださった。

ここで ISSR/SISR の学術大会の仕組みを簡単に説明しておこう。ISSR/SISR では申込段階でまず「セッション」募集が行われ、次に「ペーパー」募集が行われる。応募者は自分の発表の要旨を提出するとともに、あらかじめ選定された「セッション」のうち、どれに参加

するのかわるようになる。その後、「セッション」の企画者が、申込みのあった「ペーパー」の要旨を審査して、最終的にプログラムが決定されることになる。日本宗教学会や「宗教と社会」学会での「個人発表」や、あらかじめメンバーが決まった状態で申込みをする「パネル」や「テーマセッション」とは少し仕組みが異なるわけである。また ISSR/SISR は二言語制をとっており、英語かフランス語で発表ができる。どちらの言語で発表するのかわるあらかじめ選ぶ必要はなく、当日会場に着いて話者の多そうな方の言語に切り替えることもできる。ひとつのセッションのなかに英語での発表とフランス語での発表が混ざっていることもある。スライドは英語で発表はフランス語というパターンもある。

セッションの合間にはロビーでコーヒーや茶菓子が振る舞われたほか、2日目の7月4日には大会後に西洋式の立食パーティ、4日目の7月6日にはザ・グランドホテル（圓山大飯店）での台湾式のディナーがあり、参加者と交流を深めることができた。名前だけは知っているが会ったことのない研究者を実際に目にしたり、実際に喋ったりというのは楽しい経験である。テキストからは読み取れない人間性がわかったり、思いがけず仲良くなれたりする。筆者はヨーロッパの宗教学史に関心があるのだが、何人かの年配の先生にちょっと話を振ると、ここだけの思い出話やこぼれ話をしてくれた。同じ世代の若い研究者と知り合ったり、コロナ禍で会えていなかった研究者に再会できたりするのも嬉しい。今回はアジア開催だったので、留学時代の友達と会ったときには「有朋自遠方来」云々というのはこれかと思った。日本から参加している研究者も少なくない。海外ではなんとなくいつもより楽に話せる気がするし、異国の地で同郷の先生や友人の顔をみるとやっぱりホッとする。

国際学会というと学生や若手には敷居が高いように思えるかもしれないが、博士課程に在籍しながら参加している人もいるし、英語もフランス語も母語ではないという人もたくさんいる。また、近ごろは日本宗教学会の国際委員会が外国語発表のためのワークショップを企画していたり、IAHRでの発表のための英語原稿の添削者を紹介する体制を整えていたり、若手研究者へのサポート体制が充実しつつある。国際学会で発表したり、外国語で研究者と交流したりするのは、たしかに最初はちょっぴり緊張するけれども、知的な刺激と実りのあることである。えいやと一歩外に踏み出すことで、新しい視座が開けるし、それまで自分がいた場所の特徴もよりよく見えるようになる。知的に越境すること。それはなにものにも代えがたい楽しい経験である。

文責：田中浩喜

2023年の国際宗教社会学会のプログラムは次の URL から参照できます。

<https://conference-system.sisr-issr.org/wp-content/uploads/2021/11/37th-Biennial-ISSR-Conference-3.pdf>

写真 藤原先生による基調講演の様子

